

[認知症対応型共同生活介護用]

作成日 平成20年 2月 13日

# 1. 評価結果概要表

## 【評価実施概要】

事業所番号	0370101362		
法人名	有限会社 絆		
事業所名	グループホーム 絆		
所在地	岩手県盛岡市仙北3丁目14-41 (電話) 019-634-0433		
評価機関名	(財)岩手県長寿社会振興財団		
所在地	盛岡市本町通三丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内		
訪問調査日	平成19年12月17日	評価確定日	2月13日

## 【情報提供票より】(19年11月20日事業所記入)

### (1) 組織概要

開設年月日	昭和(平成) 15年 6月 1日
ユニット数	1 ユニット 利用定員数計 9 人
職員数	8 人 常勤 6人, 非常勤 1人, 常勤換算 7人

### (2) 建物概要

建物構造	木造 造り		
	2階建ての	1階 ~	2階部分

### (3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	33,000 円	その他の経費(月額)	円	
敷金	有(円)	(無)		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有/無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり	1,000 円		

### (4) 利用者の概要(11月20日現在)

利用者人数	9名	男性	1名	女性	8名
要介護1	2名	要介護2		3名	
要介護3	2名	要介護4		2名	
要介護5	-名	要支援2		-名	
年齢	平均 83歳	最低	74歳	最高	94歳

### (5) 協力医療機関

協力医療機関名	真瀬医院
---------	------

## 【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

利用者の毎月の生活が、家庭的安らぎの中で心と体の栄養になるようなグループホームを目指して、職員と利用者とその家族が一体となった大家族のような生活への支援に向けての取り組みになっている。幹線道路から少し入った住宅街の中に、2階建住宅を改造して開所されたグループホーム“絆”は画一的な居室にこだわることなく、それぞれ個性のある居室で利用者の入所前の吾が家と同じような段差などが気にならないホームになっている。民間会社(有限会社)運営のワンユニットのグループホームなので職員の移動も少なく、利用者職員が家族として生活を続ける上でのルールを確かめ合いながら、“笑い”を何よりもこの家族の宝として互いに支え合う日常が続いている。

## 【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	職員の研修受講歴は一覧表にしてみやすいように整理されて、研修内容もファイルで保管されている。地域でのグループホームへの理解が十分とは云えない状況であれば、地域参加の行事開催検討の中で小規模でも可能な事から始められ地域の理解と協力が得られるよう進められたいが、利用者のとまどいと混乱のことも検討事項に加えられることも重要と思われる。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	職員全員で取組まなければならない意義や目的について、管理者及び事務長から説明がなされ十分理解の上で職員は特に改善課題への取り組みを検討し実践に向けられている。討議の内容など評価に関する記録類を残されることもステップアップの材料になるのではないかとと思われる。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	会議では事業所から現在の利用者の様子や、行事の実施の内容とその時の利用者の様子など具体的な報告のほか、散歩コースの中に利用者の為に花壇を借りることやコースの中にベンチが置かれることとなる等、推進会議のメンバーである地区の民生委員の尽力に依ることなども紹介されるなど、会議の内容が事業所からの報告に終ることなく、地域の中のグループホームとして認められ具体的に地域からの協力、支援が受けられるところに来ている。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	苦情受付け窓口や投書箱の設置など、家族の意見、苦情を気軽に頂けるよう努めているが、遠慮がちの意見が多く運営の改善迄には結びつかない場合が多かった。しかし、最近では家族との馴染の関係が出来たことから面会の時などには本音で話しを頂く場面が見えてきた。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	地区自治会への加入から地域との関りを深めるよう、地区の行事への参加や、地区内清掃など積極的に取組んで、グループホームが住民の一人として認知されるよう努めているが、住宅街の中という立地からか親しみの間柄迄の関係作りには更に地域への働きかけに工夫と努力が期待される。地域密着型サービスは利用者が地域と繋がりがながら暮らしていくことを積極的に支えて行くサービスと言われている。その基盤をつくるために、地域との交流を事業所にとって必要な時だけ行うのではなく、地域で必要とされる活動や役割を担っていくことも大事なことだと思われる。

## 2. 評価結果(詳細)

(  部分は重点項目です )

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
<b>1. 理念と共有</b>					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	グループホーム“絆”の社員の誓いと“絆で考える10の訓”で、より家庭に近く、より温かく、より笑い声の絶えない、ホームをめざしての理念をかかげて支援に向っている。		事業所の理念は、事業所の目指すサービスのあり方を示し、全体として質の確保に取り組む基本的考え方である。制度改正で示された“家庭的な環境と地域住民との交流の下で”の理念が十分理解されて、地域密着型サービスとしての役割が果されることが期待される。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎月の定例会議での確認と、申し送りの時実践での状況を確認合っている。また、職員全員が共有出来るよう申し送りノートにメモを貼って管理者にも確実に状況が届くようになっている。		
<b>2. 地域との支えあい</b>					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	町内会へ加入し回覧などの地域の情報を受けることや、地区の清掃活動、行事への参加、ボランティアの受け入れ、更には地区内にある花壇の手入れをまかせて頂くなど地域に理解されつつある。	○	近隣地域内からの利用者が居られないと、地域からの理解や馴染の関係が薄くなることが懸念される場合も考えられる。事業所が日々積み上げている、高齢者の暮らしに役立つ支援に関する知識や機能を地域の人々に向けて活かして行くことなどもその関係作りに有効なことと思われる。
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	全職員とも評価の意識や目的については、管理者などからの説明を受けて自己評価に参加して、サービスの質の確保や向上に繋げていくよう前向きに取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の中で、地区内の担当民生委員さんからホームの散歩コースの中に休憩用の椅子が置かれることになったことや、災害時の避難場所として近くの中学校では不適であるとの意見など具体的に協力を頂いている。推進会議のメンバーの中に交流のある他のグループホームの職員の参加が加わるなど、運営推進会議に多様な機能の活用が出来ている。		運営推進会議に事業所の自己評価や外部評価の結果を示して、取り組みや改善経過のモニターとして推進会議は適役である。評価と会議の機能を一体的に活かしていくことで相乗効果も期待出来ると思われる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	直接、市の関係部門との密接な関係までには至っていないが、福祉課の行政担当者には、ホームの“ニュースペーパー”などを届けて、利用者の情報の交換を行っている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	利用者の生活経過記録を毎月家族に届ける(金銭管理表を同封)ほか、本人の状態変化ごとに電話連絡で速やかに家族に伝えてその内容を日誌に記録している。		地域密着型サービスの目ざす、利用者家族とのきめ細かいやりとりがよりよいサービスに繋がるとの思いから、定期的な報告のほかにもあらゆる接点での情報提供が積極的に行なわれることが望まれている。また利用者個人に属するもの特に金銭などの取扱いについては要領などを定めて管理されることが望まれる。
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者家族の面接時に色々な話や意見を聞かせて頂いていますが、最近では本音でお話頂くようになり運営に活かせるようになっている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	運営が単体での事業所なので、職員の異動は退職者以外にはなく、利用者への影響は少ないと思われる。職員の交替はホームで発行する“ニュースペーパー”でお知らせしている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員の研修や、外部での研修参加には意欲的に取り組んでいるが、勤務のカバーリングは運営面での苦勞がつきもののようなのである。職員個々の研修履歴が整備されている。		利用者への個別対応や柔軟な支援が求められる地域密着型サービスの実践力を身につけていくためには、職員が日々の体験を学びにつなげていく意欲と努力が求められる。介護の現場で共に考え助言する知識と実務に精通したベテラン職員が確保された当事業所ではその機能の活用が期待されるところである。
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会に加盟し、盛岡地区での交流研修や親睦行事にも参加し交流を行なっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	申し込みの時、居宅訪問面接の手順からの入居が多い現状であるが、出来るだけ見学での十分な理解と納得した上での入居につなげていくよう努めている。		地域密着型サービスでは、比較的近い距離に居住される方が利用されて、職員が利用者本位に柔軟な働きかたをするなどの特徴がある。本人とその家族などにあった個別の利用開始の調整が大事なことだと思われる。
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者に先輩としての尊敬と、生活の達人から色々なことを学び支え合う関係作りに努めている。日常的には家族の一員として、やってはいけないことは素直に注意しともに過ごし支え合うように努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者が自分で決める(自己決定)ことを尊重し、テレビ視聴や家族との面会は時間の制限は特になく、散歩や外出も職員同伴で利用者の意向を大事にしている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	3ヶ月ごとに介護計画の見直しを行い、本人本位の状況、家族の意向、職員の観察などから出来ることを伸ばしていく方向で計画に繋げていっている。利用者の状態変化にはその都度、計画の検討を協議している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	利用者全体に大きな変化なく経過していることは、利用者本位で安定した生活の為に支援が提供されているものと思われる。利用者の中には、介護度の改善につながった事例もあり、協力医療機関からの適切な情報や、きめ細かい対応で現状に即した本人本位の計画になっている。		安定している利用者の場合でも、常に新鮮な目で本人や家族の意向や状況を確認すると共に、ケア関係者の新しい情報や気づき、ケアのアイデアを集めて、変化の兆しに予防的に対応していくための介護計画の見直しが望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
<b>3. 多機能性を活かした柔軟な支援</b>					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	利用者に本物の家庭を提供することを、現在事業所が目指している大事な機能の一つにして、本人の状況や要望に応じた支援に向けている。		利用者と家族の日々変化する状況や重度化していく状態から要望に応じて、必要な時必要なサービスを臨機応変かつ柔軟に馴染の職員が、馴染の場所で提供して本人の暮らしの継続性を守ることが、多機能性を活かす支援と考えられている。
<b>4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働</b>					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者は月1回は投薬を受けながら協力医院での受診、医院の看護師が週1度来所のほか、協力医院の医師の往診は深夜でも受けられ医療面での対応が確保されている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	職員と共に話し合い、看取りの指針を作成しているが、現在の所最終的な決定は家族の意向に委ねている。		本人や家族の大きな関心と不安のひとつが、重度化した場合の対応のあり方である。本人、家族と事業所側の考え方や意向がずれたまま重度化の時期を迎えることのないよう、出来るだけ早期から関係者が話し合い、全体の方針の統一を図っていくことが重要なことだと思われる。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
<b>1. その人らしい暮らしの支援</b>					
<b>(1)一人ひとりの尊重</b>					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員からの話しが聞こえにくい利用者に対して、他の方に聞こえるような大きな声で話しかけない(プライバシーをそこねる内容)など特に羞恥心に配慮している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の要求を少し待ってもらう時など、その理由をよく話し納得の上で対応しているほか、外出支援その他は希望通りにしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
<b>(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援</b>					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者は主に、ランチマットなどのセッティングや後片付けにまわり、メニュー作りと調理は全職員で行ない利用者の好みに合わせるように努めている。		地域密着型サービスならではの暮らしの場面として、調理、食事、後片付けなど、利用者個々の力を活かしながら職員と一緒にこなすことも大切なことと考えられる。職員に支えられながら利用者が力を発揮できることは、張り合いや自信、楽しみや喜びとなり心身の力の維持や向上にもつながると思われる。
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	利用者の希望に対応出来るような体制作りが行われ、夏場などのシャワー浴には随時応じている。時間帯は午後から夕食前が多く、極力本人の自力を促し過剰介護にならないよう生活リハビリを目指している。		
<b>(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援</b>					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者の生活歴の中で得意だったこと、好きだったもの、今興味を持っていることなどに対応するため、裁縫道具、歌をうたえる場所、電子ピアノを本人の部屋に持ち込むなど工夫がなされている。		加齢と認知症が進む過程で、自分ひとりで楽しむことや役割をうまくこなせなくなっている。それでも体で覚え込んだ記憶は消えにくく豊富なことが多く、見ているだけでも楽しい気持ちや活力のもとになることも考えられる。利用者の豊かな暮らしを支えるために、ひとりの役割や楽しみごとなどを作り出す職員の働きかけが期待される。
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	通行量の多い幹線道路に近いことから、道路横断をさけるようにして安全な散歩コースを設定し本人の体調を見極めてコースの長短を決めている。		
<b>(4) 安心と安全を支える支援</b>					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関と門扉の施錠は夜間のみにして、昼間の出入りにはセンサーで2重にチェックが出来るようになっている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	運営推進会で、メンバーの中の町内会長と民生委員さんから安全な避難場所の情報を得て場所の確認をしている。グループホームの建物の構造上(2階建て)夜間での避難には応援が不可欠なので消防関係を始め地域からの援助を期待している。	○	災害時の具体的な避難策を検討した場合、職員だけでは誘導には限界がある事を認識し、消防関係や専門分野、近隣地域の方々の協力が得られるよう、日頃からそれぞれの関係者へのお願いをすると共に、事業所側からの適切な情報も伝えられて協力関係作りに努力されたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日に20種類の食材を使った食事になるよう心掛け職員で意見を出し合っ旬のもので季節感が味わえるような献立の工夫をしている。介護職員の中に栄養士がおり、特に水分の制限を受けている方にはチェック表を活用し水分管理を注意深く支援している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	2階建て住宅を改造して開所したグループホームのため、安全面での課題(段差)はあるとしても、生活感あふれるその中の利用者は、かつての我が家を思い起してか、それぞれ注意深く行動し職員も見守りと支援に努めている。		普通の人には何でもない音や光の刺激が、認知症の方にはストレスになることも多く、日常的に注意が求められる。居心地のよさや心身の活力を引き出すために、生活感や季節のあるものをうまく活用しながら暮らしの場を整えていくことも大切なことである。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	住宅の改造なので利用者の居室は画一的ではなく、それぞれ工夫され、居室の中には利用者の思いが込められたものがあり、生活の場を感じさせる。		